

# 目的論的機能主義——生産者重視の表象論の検討

勝亦佑磨 (Yuma Katsumata)

日本学術振興会特別研究員・東京大学

本発表では心の哲学における、心的状態の内容を説明する代表的な立場である、目的論的機能主義における問題を考察する。一般に、私たちの心的状態の多くは、ある状態を表象し、そうした表象内容（あるいは心的内容ないし内容）を持つと考えられる。例えば「目の前に熊がいる」という信念は、「目の前に熊がいること」を表象し、「目の前に熊がいること」という表象内容を持つと考えられる。目的論的機能主義はこうした表象内容を、心的状態を生物の心臓や肺のように「生存に有益な」機能を持つ状態として捉えることで、説明する立場である。目的論的機能主義の主流な見解は、ミリカンによる進化に基づく表象論（例えば Millikan, 1993）であり、それによれば、心的状態を生み出す形成機構（生産者）とそれに基づいて行動を引き起こす利用機構（消費者）は、それぞれの機能を持つために祖先の生存や繁殖に役立ち、それゆえに進化の過程で選択され、現在においても存続している。このようにして選択されてきた生物の器官や特質の持つ機能は目的論的機能と呼ばれ、目的論的機能主義の論者はこうした目的論的機能によって心的状態の持つ表象内容を説明するのである。

とはいえ一般に、心的状態の内容を機能から説明しようとする、機能が一義的に確定せず、次のような、「内容の不確定性の問題」が生じる。例えばカエルは、餌であるハエと小さくて黒い動く他のもの（例えば BB 弾など）を視覚的に見分けることができない。そのため、カエルがハエに対して舌をのぼす際に生成される知覚の内容は、「目の前にハエがあること」であるのか、それとも「目の前に小さくて黒い動くものがあること」であるのかが不確定になってしまうという問題が生じる<sup>1</sup>。

だが少なくとも、ミリカンによる、表象の消費者重視の理論は、こうした内容の不確定性の問題に一定の解決策を与えていると考えられてきた。ミリカンは、目的論的機能の観点、すなわちその生物の祖先の生存に貢献してきたのはどのような機能かという点からこの問題を解決する。ミリカンによれば、（単に目の前に小さくて黒い動くものがあるときではなくて）目の前にハエがいるときにある知覚が形成され、ハエに向かって舌を伸ばすという行動が引き起こされたことがカエルの祖先の生存に有益だったために、カエルの表象の形成機構と利用機構は選択されてきた。それゆえ、カエルの表象内容は「目の前にハエがいること」であるとして確定されるのである。このようにミリカンの理論は、表象内容を説明する際に、表象がどのように「利用される」ことが生物の生存に役立つのかという側面を重視しているという点で、表象の消費者重視の理論である。こうしたミリカンの立場は、目的論的機能主義の議論が最も盛んであった 1980 年代後半（ないし 1990 年代）のみならず現在においても、強力な立場

---

<sup>1</sup> さらに、餌となるハエが小さくて黒い動くものと共外延的であるような環境で進化してきたようなカエルの例が問題となるだろう。

である。

しかしながら、2000年代以降、表象の生産者重視の理論を評価する立場が注目されてきた。その背景には、次のようなことが挙げられる。第一に、ミリカンのような消費者重視の理論は、説明の循環の問題を抱えているのではないかという批判がなされたことである (Shea, 2007)。シェイによればミリカンの理論は、現在におけるある生物の表象の内容を行動の成功によって説明するとともに、その表象内容によって行動の成功を説明しているという意味で、循環が生じている。こうした循環の問題を解決するために、シェイは、表象の消費の側面としての行動だけでなく、表象の生産の側面としての情報<sup>2</sup> (より正確には相関的情報と呼ぶもの) の概念を取り入れることを提案する。シェイによれば、現在におけるある生物の表象の内容は、行動の成功によってではなく、こうした相関的情報の概念によって説明される。このようにシェイは、従来の目的論的機能主義に情報の側面を加えた、「情報-目的意味論」と呼ばれる新たな目的論的機能主義の立場を提案する。

第二に、表象の生産者重視の理論は、認知科学のデータと整合的であるという点である。ネアンダー (Neander, 2006) は、カエルが実際にどのような形に反応するかを調べた実験的なデータに基づいて、カエルの表象内容が「目の前にハエがいること」ではなく「目の前に小さくて黒い動くものがあること」であることを示す。こうした説明は、カエルの識別能力に基づいてカエルの表象内容を決定しているという点で、ハエと小さくて黒い動くものを見分けることができないカエル自身の立場に近い視点から表象内容を説明できるという利点がある。

それでは、ミリカンによる表象の消費者を重視する目的論的機能主義の従来の立場は、シェイやネアンダーをはじめとする、生産者を重視する新たな立場からの批判に、耐えうるものなのだろうか。さらに生産者重視の新たな立場は、消費者重視の従来の立場よりもほんとうに優れた表象論を展開しているといえるだろうか。本発表では以上のような点から、目的論的機能主義の問題を考察したい。

#### 主な参考文献

- Dretske, Fred. 1981, *Knowledge and the Flow of Information*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Neander, K. 2006, "Content for Cognitive Science," G. Macdonald and D. Papineau (eds.) *Teleosemantics*. Oxford, OxfordUniversity Press.
- Millikan, Ruth G. 1993, *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Shea, N. 2007, "Consumers Need Information: Supplementing Teleosemantics with an Input Condition," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.75(2), pp.404-435.

---

<sup>2</sup> とはいえ、かつてのドレツキのように、厳密な法則による情報関係によって表象を説明するような表象の生産者重視の立場 (Dretske, 1981, 1988) は、誤表象を説明できないために問題があるとして多くの批判を受けてきた。シェイはこれを受けて、表象の説明の際に、ドレツキよりも制約を緩めた情報の概念を用いている。